

## 谷崎家・江沢家とブラジル

細江 光

この度、谷崎潤一郎の妹・伊勢さんの生涯、およびブラジルに移住した江沢家・谷崎家の人々について、また潤一郎の弟・得三氏に関連して、新たな事実を知る事が出来たので、ここに報告して置く。

今回の報告の内、江沢家については、江沢千恵さん、ブラジル関係については、伊勢さんのお嬢さんでブラジル・サンパウロ在住の三沢悦子さんのお手持ちの資料や、三沢さんがブラジルの林家・江沢家・谷崎家の親類縁者に問い合わせて集めて下さった資料に拠る所が大きい。また、得三関係については、潤一郎の妹・末さんの御子息・谷崎秀雄氏からの御教示にもっぱら依拠している。その他、綾部（旧姓小龍）嬰子さんからも御教示を得た。ここに記して、多大なる感謝の意を表します。

### 一、谷崎潤一郎の妹・伊勢さんについて

既に知られている事柄に新事実を交えつつ、伊勢さん（以下、敬称略）の生涯の概略を以下に辿って見る事にする。

伊勢は明治三十二年十一月五日生まれ（三沢悦子さんによる）。本人の著書『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、最初は葛飾の農家に里子に出され、潤一郎は父母と一緒に、または一人で代理として、里扶持や衣類などを持って、よく里親の所へ行ったらしい。伊勢は四歳の時に、妹・末とともに、子供がなかった葛飾小松川の叔父・谷崎万平の家に養女に遣られる。伊勢が里親の所から連れて来られた日の事は、お京（Ⅱ園）

の五月十八日付け日記という形で、精二の小説『妹』（T 6 / 1「新潮」）に記されているものが、事実に近いと思われる。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、万平は、地底の水脈や鉱脈を掘り当てる仕事をしていた。伊勢は、小学校が休みの時などに、父母の家によく遊びに行っており、その折の潤一郎の想い出も書いている。

『妹』によれば、伊勢は、小学校を一年の時からずっと一番で卒業まで通したので、担任の先生が大層惜しがって、是非東京へ出して女学校へ入れろと万平に勧めたと言う。『妹』には、大正四年秋に、小学校を卒業した伊勢が、谷崎家に遊びに来た事が描かれている。精二は父母・終平（作中では弘治・八歳）と同居しつつ、原稿を書きおき、養女にやられていた伊勢（作中ではお定）が二、三日泊まりに来、里親にも会いに行くという話である。この後、伊勢は向島（作中では品川）の潤一郎の所で四、五日遊んでから小松川に帰る事になっているが、潤一郎の家の描写はない。ただ、母が「あっちの兄さんは此の頃景気が好いから屹度芝居へでも何処へでも沢山連れて行ってくれるよ。」と言うのは、潤一郎が『お雛殺し』で儲けた事を知っているの発言らしい。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、潤一郎の妻・千代子

が、『妹』の掲載された「新潮」を送ったので、伊勢はこれを読んで、精二に自分の不幸を訴える手紙を書いた。精二の小説『さだ子と彼』（「新潮」T 9 / 5）に、その手紙は引用されている。

『さだ子と彼』によれば、精二はこの手紙を読んで、父・倉五郎に伊勢を呼び戻す事を提案したが、倉五郎は今更返せとは言えないと反対した。翌大正七年、精二は結婚して別に家を持ち（2 / 21「よみうり抄」）、伊勢を自分の方に引き取ろうと考えたが、これも倉五郎の不賛成で実現しなかった。しかし、年末に倉五郎が脳溢血で倒れたため、看護と家事手伝いのために、伊勢も呼び戻され、大正八年二月二十四日に倉五郎が死んだ後も、そのまま潤一郎の許に留まった。万平叔父も、そっちで嫁にやっても構わないと言った。

『さだ子と彼』に、潤一郎から大正八年十二月に聞いた話として書かれている事によれば、大正八年五月頃、潤一郎一家が伊香保に滞在中、後に伊勢と結婚する事になる青年紳士・中西周輔（三沢悦子さんによる。作中では河本）と同じ宿に泊まり合わせ、悪意になる。中西は潤一郎の部屋へ話しに来たり、伊勢や終平と散歩に出たりした。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、伊香保へ行ったのは

千代子が胸を患ったためで、最初、潤一郎が来る前に、A(中西)は潤一郎の愛読者でフェミニストでクリスチャンだと称して千代子に取り入り、千代子が伊勢を中西に紹介した。中西は有名な物産(三井物産)社員で、海外勤務の経験もあった。先妻とのトラブルで神経衰弱になり、転地療養に来ていた。

『さだ子と彼』によれば、中西はK市の高等商業出身だった(神戸高商の卒業生名簿にはない)。暑くなって来たので、潤一郎一家が伊香保から塩原へ転地すると、暫くして中西も移って来た。(大正八年に伊香保・塩原に行った事は、同年五月六日付け瀧田樗陰宛書簡40と八月十三日付け中根駒十郎宛書簡41Aなどによって確認される。)潤一郎は多忙のため、千代子が伊勢が相手をした。潤一郎一家は、秋になって塩原から帰京。中西も後から帰京し、その後もちよいちよいやって来て、千代子や伊勢と話し込んだり、伊勢・終平と一緒に散歩に出たりした。中西は精二より二つ三つ年上で、子供が二人あった。前の妻は家柄は良かったが、傲慢・不従順で虚栄心が強いため、合意の上、離婚したと言っていた。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』では、結婚の話が出たのは伊勢の二十一の春(大正八年春)とされているが、『さだ子と彼』によれば、大正八年の十一月頃である。潤一郎は躊躇したが、

中西から、頻りに伊勢に催促の手紙を寄越すので、潤一郎は、手紙は直接自分に宛てて出すよう言っていた。潤一郎は気が進まなかったが、伊勢は結婚を強く望んだ。潤一郎はM社に居る親友・T氏(恐らく三井銀行の土屋計左右)に中西の評判を調べて貰った。その上で、十二月に精二を自宅へ呼んで、相談した。その時、潤一郎は、「信用ある人物を媒酌人に立てる事を条件に纏めようと思うがどうか。その前に先方の血統も是非調べてみなければ」と言っていた。精二は血統より、相手の誠意・品性を調べるように言った。この頃、伊勢は、潤一郎が結婚に反対のため、小松川に帰っていたが、潤一郎は、O町(小田原)へ転居する直前、精二・万平叔父・伊勢を自宅に集めて再度話し合った。万平叔父は老後の生活補助を求め、潤一郎が中西に伝える事になった。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、周囲はみんな反対だったが、「本人同士がよかつたらそれでいい」という潤一郎の言葉で結婚が決まった。いかにも潤一郎らしい結婚観である。

大正九年一月二十九日付け精二宛潤一郎書簡42には、「小松川より来書結婚の事に相定まり節分までに先方にて可然媒酌人を立て結婚取り交はす事に相成候」とあり、結婚が正式に決まった事が分かる。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、潤一郎は伊勢の結婚費用を捻出するために、少なからぬ借金をして、その返済に長く苦しんだ。また『さだ子と彼』によれば、精二も毎晩遅くまで執筆して、お金を作った。

結婚式を間近に控えた大正九年三月三日付けで小田原から精二に宛てた潤一郎の全集未収録書簡が、青木正美氏によって紹介されている(『彷彿月刊』1992/9「作家の手紙」(4))ので、ここに全文を写して置く。

拝啓

陳者御いせ結婚のこと、いまだ確定はせされど多分来る三月十四日頃東京偕楽園にて式ならびに披露をすることゝなるべく、明日中西氏来訪その上にてシカと取り定め、又改めて御しらせ可致候

さて、支度の方は、結婚衣裳、その他新婚旅行等に必要なる衣類不段着、一と通りは当方にてすでに取りそろへ、来る十日に註文品全部出来の手筈になり居り候。お前の方にて箆笥を買はうかとの話なりしが、箆笥は小松川にて整へ、その他偕楽園等にて何か祝つてくれる由につき、万一同じ品物がカチ合つては不都合故、いつそ現金にて当方へ御送りなされ度、目下小

田原にいせも居ること故、同女と相談何か必要なものを買ふか、或は当方の支払ひの一部に充てたくと存候。兎に角この手紙が着いたら、お前の方で都合つくだけの金を(150位でよし)為替で御送り下され度候。

右要用まで

三月三日

谷崎潤一郎

精二殿

この手紙に対して精二は、「百五十円以上は難しい、それに今手許には八十円しかない」と書き送ったと見え、三月六日付けの精二宛潤一郎書簡43で、潤一郎は、「それでいいから至急送れ、残りは十四五日で結構」と言い送っている。

『さだ子と彼』によると、結婚式の三日程前になって、精二は軽い盲腸炎を発病。精二夫妻は式を欠席する事にし、精二の家に集められていた箆笥・鏡台・衣類など、伊勢の嫁入り道具は、すぐに中西の家へ送り出した。(『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、中西と伊勢が結婚して初めて住んだ家は、精二の家(牛込区弁天町六)のすぐ近くだった。)

式の前日の夜遅く、伊勢は末と一緒に精二の家に来て一泊。式の日朝、千代子が鮎子を連れて精二の家に来て、精二の妻と一緒に伊勢の着付けをして、自動車で出発した。式後、中西と伊勢は、すぐに京阪地方へ新婚旅行に旅立った。精二の小説『従妹』（『新潮』T13/4）によれば、新婚旅行先から、「昨日は奈良を見物し、宇治にて一泊いたしました。（中略）旅へ出て五日間が楽しく、だが夢の様に儚なくなつてしまいました」という意味の葉書が来たと言う。

恐らくこの旅から帰った後、『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、中西は式に招待できなかった会社の部下数人を帝國劇場に呼んで、披露を兼ねた観劇の宴を催した。

しかし、そうした幸福は長続きしなかった。結婚してみると、中西は先妻との間にもまだ問題を残しており、その上、他にも女性関係を作っていた。また、谷崎潤一郎の愛読者などと言っておきながら、家には一冊の文学書もなかった。そして、伊勢の学歴を承知で結婚して置きながら、伊勢の無学を嘲笑した。大正十年五月十四日、中西と伊勢の間に長女・道子が誕生した（三沢悦子さんによる）。潤一郎は子供が一人の内に帰って来るように言ったが、伊勢にはその決心が付かなかった。

『従妹』によれば、大正十一年頃、中西は会社を解雇され、

その後適当な勤め口も見つからないで、大正十二年頃は、保険会社の外交員の様な事をしていたが、生活はひどく窮迫していた。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、中西は親戚の金を掻き集めて自分で事業を興したが、これも失敗した。潤一郎は数か月間、毎月月末に、一定額の生活費を伊勢に送った。

大正十二年、中西と伊勢の間に二番目の子供として、男の子が生まれた。（三沢悦子さんによれば、正確な名前及び誕生の日日は分からないが、ゴーちゃんと呼ばれていた。）

『従妹』によれば、伊勢は男の子を産んだ後、精二の家に逃げて来た。男の子は、中西が渡さないで、置いて来た。伊勢は、中西と離婚してタイプライターでも習って自活したいと言った。精二はむしろ中西に同情的で、離婚には反対したが、暫く伊勢を家に置く事になった。その間に、男の子は風邪から肺炎を起し、死亡した。（三沢悦子さんによれば、大正十三年一月四日、医者の家に向かう人力車の上で、伊勢に抱かれて死んだと言う。）

この後、伊勢が兄・潤一郎のもとへ一旦身を寄せた事は、大正十三年三月九日付けで、兵庫県武庫郡六甲音楽園万象館から出した潤一郎の精二宛書簡48から分かる。潤一郎は精二とは逆

に、夫婦の事は夫婦で決めるべきだとしつつも、離婚したいという伊勢を正当として支持していた。

伊勢は三月十八日に、その日付けの精二宛潤一郎書簡49を持って、再び精二宅に戻る。そして、九月二十四日、中西と伊勢の間に三番目の子供としてヨーコという女の子が生まれる（三沢悦子さんによる）。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、その後、（恐らく大正十四年に）半年程、伊勢は二人の娘を連れて、潤一郎の許へ逃げ帰っていた。潤一郎は弁護士を頼んで、伊勢と中西の離婚話を纏めようとしたが、中西が子供を渡さないため、伊勢は離婚を諦めた。

恐らくこの際であろう、大正十四年九月九日に京都市黒谷西住院より精二に宛てた潤一郎の書簡62に、〈おいせは先日自分の方から中西方へ帰りたいと云ひ出して、向うがあやまりにも迎へにも来ないのに行つてしまつた〉と、不満気に書き送っている。

翌大正十五年九月二十四日、潤一郎は佐藤春夫に宛てた手紙75の中で、伊勢が近くブラジルへ出発する事と伝えている。恐らく九月末か、十月中に出発したのであろう。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、中西は、潤一郎の従

兄の谷崎平次郎一家がブラジルに移住した（後出）のを見て、農民でなくても移住できると知り、日本から逃げ出す気になつたらしい。伊勢と中西は、雇用先が予め決まっている契約移民としてではなく、自由渡航者としてブラジルに渡つた。この時、潤一郎と千代子は神戸港まで見送りに行つた。千代子は一生懸命別れのテープを投げたが、潤一郎はテープを一本だけさもきまり悪そうに持つて、なるだけ目を伊勢と合わせないようにしていたと言う。

今東光の『谷崎潤一郎論』（「不同調」S2/8）によれば、この時、潤一郎が袴を着けているのを今東光は見たと言う。

また、市居義彬氏の『谷崎潤一郎の阪神時代』所載の反高林で谷崎の隣に住んでいた榑崎猪敏夫妻の話によれば、榑崎夫妻の父が中西と知人だった関係で、中西と伊勢はブラジルへ渡る前、何日か榑崎家に泊まり、宝塚へ案内して貰つたりした。ところが、伊勢は「お早よう」などの挨拶もしなかつた。また、神戸港へ見送りに行つた時、千代子は涙を流して別れを惜しんでいるのに、潤一郎は「氣を付けて行けよ」とも言わなかつたと言う。

恐らくこれらは、一つには潤一郎のはにかみ癖のためであり、また一つには、このブラジル行きに、潤一郎が内心反対であつ

たからでもあろう。昭和八年四月七日及び十一月十一日付け精二宛書簡137・143にあるように、ブラジル渡航の際、潤一郎は伊勢に、中西と離縁するよう勧めたのに対して、伊勢は「子供と別れるのは厭だ、いかなる苦勞も覚悟している」と言うので、潤一郎も仕方なく手を引いたのである。この事は、後に伊勢が「中西と別れてブラジルから帰りたいから金を送って欲しい」と依頼して来た時に、潤一郎がやや冷淡な態度を示す原因になったと思われる。それでも、昭和六年六月三日・昭和八年十一月十一日の精二宛潤一郎書簡116・143にあるように、この時、ブラジルへ渡る船賃（旅費）は、（恐らく中西の分も）潤一郎が出したのである。（ただし、『ブラジル日本移民史年表』（無明舎出版）によれば、ブラジル渡航移民全員の船賃及び移民会社の手数料は、大正十四年から日本政府が負担する事になった。とすれば、潤一郎が負担したのはその他の雜費だったのである。）

この当時、日本からブラジルへは、船で一ヶ月半から二ヶ月程かかったから、二人は十月の初旬か中旬までに出航して、十二月中に着いたと考えられる。

林伊勢「叔母の死」（『パウリスタ新聞』第7525号（一九二九年頃）六面）によれば、ブラジルに着いた直後、伊勢がサ

ントスからルスの駅に降りた途端、谷崎平次郎の妻なかと思ひ掛けず邂逅し、「平次郎は馴れない百姓仕事で借銭が重なり、その返済のために一時日本に帰国している。その留守中に、なかの父江沢藤右衛門は亡くなった、あなたが来ると分かっていたら止めたのに」と言われたと言う（藤右衛門は後述するように、大正十五年十一月二十一日に亡くなった）。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、中西と伊勢は、サンパウロまで行ったが、中西には農業をするつもりはなく、わずかな内職しか見付からなかったのが、サンパウロから三十キロばかり離れたソロカバナ鉄道沿線の別荘の留守番のような仕事に付いた。

昭和二年五月五日付けの精二宛潤一郎書簡84によれば、潤一郎はブラジルに帰る平次郎に、旅費や小遣いなど五六百円を渡した上に、伊勢に送るお金をこつづけたが、平次郎は伊勢に渡すべきお金を全額着服してしまったと言う。（五六百円は、今日の百数十万円に当たろう。）

同書簡についての精二の『明治の日本橋・潤一郎の手紙』の《註》によれば、伊勢が中西と別れ、子供を連れて帰国したいから旅費を送ってくれと言って来たので、伊勢と子供は精二が引き取って世話をするという条件で、潤一郎が伊勢に旅費を送

ったが、丁度ブラジルで革命騒ぎが起こって通信が途絶したため、為替は伊勢の手許に届かず、返送されて来たと言う。また、『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、別荘の留守番をして餓死寸前の生活をしていた時に、精二の名前で郵便為替が送られて来たが、革命騒ぎのせいで、四分の一しか届かず、残りは返送されてしまった事が、後になって分かったとある。しかし、

ここで言う『革命騒ぎ』とは、ゼツリオ・ヴァルガスが、大統領選挙に敗れたあと、昭和五年十月から十一月の革命に成功して、臨時大統領に就任した時か、或いは昭和七年七月から十月にかけての所謂サンパウロ護憲革命を指す筈であり、精二・伊勢共に、後年の出来事と混同しているように思われる。昭和二年十月九日付けの精二宛潤一郎書簡91に、『おいせの方へも平次郎氏に使ひこみをされてから、可哀さうだと思ひながらまだ送らずにゐる始末だ』とある事から、恐らくこの年には、精二が少額の郵便為替を送っただけだったと推定される。

潤一郎は、昭和二年九月一日付け精二宛書簡90で、『ブラジルのお伊勢には、手紙を出して、考えを聞いて見るが、子を引き取るのはどうしても厭だ』と言っており、一方、伊勢は『兄潤一郎と谷崎家の人々』で、潤一郎から、子供を連れて帰らなという条件でなら一人分の旅費を送るという手紙を貰った事

があると云っている。推測の域を出ないが、これはこの頃の仕事で、潤一郎には、子供を捨てない限り中西と離婚する事は出来ず、問題の解決にはならないという考えが強くあったのであろう。

昭和二年十月十日、三年前、中西と伊勢の間に生まれた三番目の子供・ヨーコが脳膜炎で死亡した(三沢悦子さんによる)。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、死因は消化不良となっている。この後、伊勢は、中西宛に届いた先妻の手紙を読み、中西が先妻に復縁を迫っていた事実を知ると、絶望の余り、長女・道子を連れて家を出、近づく汽車に向かって土手を駆け上がろうとした所を日伯新聞の社員に抱き留められた。これが機縁となり、伊勢はサンパウロに出て、日伯新聞の炊事人となった。こうして中西と別居した伊勢は、その後、サンパウロで、日本人が経営している上地旅館で働くようになった(昭和八年の伯刺西爾時報社編『伯刺西爾年鑑』によれば、上地旅館はサンパウロ市内 Rua Bonita 11-12にあった)。

石川達三の『心に残る人々』によれば、石川は、昭和五年の五月から六月にかけて、この上地ペンソンに滞在しているが、その際、或る邦字新聞記者から、ここで炊事をしている小母さんは潤一郎の妹だと教えられた。なお、その新聞記者は、伊勢



は日本から来た亭主と別れて、今はペンキ屋の女房になってい  
る、と語ったらしいが、事の真偽は不明である。

その後、昭和六年三月二十四日・五月十八日付けの精二宛潤  
一郎書簡112・114、及び書簡112についての『明治の日本橋・潤一  
郎の手紙』の《註》によれば、伊勢は再び、中西と別れ、子供  
を連れて帰国したいからと、旅費を送るようになって来た。が、  
潤一郎は丁度お金に困っていた時だったので、すぐには送金で  
きなかった。この頃は、世界恐慌によるコーヒー豆の大暴落な  
どで、ブラジル経済が大打撃を受けていた時なので、伊勢も見  
切りを付けて帰国しようとしたのかも知れない。

ところが、昭和六年五月下旬になって、伊勢は風邪から急性  
肺炎を起こし、危篤となつてしまった。精二の「潤一郎追憶記」  
によれば、この時は、中西が早稲田大学宛に「イセキトクカネ  
オクレ」と電報を寄越した。精二は雑誌社から百円を前借りし、  
潤一郎にも送金を頼んだ。これに対する潤一郎の返事が五月二  
十八日付け精二宛書簡115で、「貯金もなく、今、高野山に来て  
居てどうする事も出来ないの、取り敢えず百円送ってやって  
くれ、五十円は来月中に精二に返す」というものであったが、  
この返事に対して精二は激怒して、「女房を質に置いても金を  
作れ」と書き送るなどの事があった。

この後、潤一郎は、同年六月二日に精二に五十円を送り、六  
月十五日付けの精二宛書簡117でも、《御い勢病状よろしとの事  
何よりに存候帰国の旅費之事は（中略）少しでも早く工夫いた  
すべく候》と書き送っている。

その後も伊勢の処遇は、精二が繰り返し問題にしたらしく、  
潤一郎も昭和七年五月十五日・九月十四日や昭和八年四月七日  
・五月五日・八月七日付け書簡などで答えていたが、遂に十一  
月十一日付けの精二宛書簡143で、潤一郎は精二と絶交するに至  
る。

『明治の日本橋・潤一郎の手紙』の《註》によれば、精二が  
伊勢とその娘を引き取って一生世話をするから二人の帰国の旅  
費だけ出してくれと頼んだのに対して、この頃、潤一郎はお金  
に困っていた事もあり、過去の経緯もあって、《帰国の旅費は  
当分調達の見込なし先づ来年あたりになつてみなければ分らぬ  
といふより外なし（中略）小生としてはむしろ彼地に溜まりて  
運命を開拓せんこと望ましく思ふ也》（S8/4/7）といっ  
た調子だったため、精二が腹を立て、潤一郎を怒らせるだけの  
相当烈しい非難の手紙を送った為と言う。二人の絶交は五年半  
続き、昭和十四年六月十四日に精二夫人・イクが死去した際、  
葬儀の案内がなかったにも関わらず、潤一郎が関西から上京・

列席した事で、和解が成立した。

ところで、皮肉な事に、丁度この絶交事件が起こったのと同じ頃、ブラジルでは伊勢が、生涯の伴侶・林貞一を得て、目出度く昭和八年八月二十四日に式を挙げていたのである（写真1）。

三沢悦子さんによると、伊勢と貞一の結婚を仲立ちしたのは、谷崎平次郎・なか夫妻である。貞一は、日本に居た時には平次郎の会社の従業員で、ブラジルにも平次郎一家と一緒に渡るなど、深い関係にあったのである。

(写真1) 林貞一・伊勢・道子

一方、中西周輔のその後については、今の所、不明である。

『ブラジル日本移民史年表』によれば、昭和七年一月十四日に創刊された「日本新聞」の主筆に中西周甫が迎えられているが、これが伊勢の元の夫と同一人物かどうか、確証がない。同年表は、この人物が、昭和十五年八月十六日サンパウロ市に設立された日本商業会議所の書記長になった事と、昭和二十五年に、「北巴拉ナ国際植民地開拓十五周年史」という著書を刊行した事を記録している。

貞一・伊勢夫妻には、昭和九年九月二十五日に長男・シNTAXが生まれたのを初めとして、以後、悦子・マサコ・レイコが生まれた。

貞一が勤めていたのは、サンパウロ市イルスン・シンプリシアーナ街にあった羽瀬作良商店であった（写真2）。昭和三十四年十一月サンパウロ新聞社発行『輝ける人びと』などによれば、羽瀬作良は、明治二十七年五月、大分県生まれ。昭和二年二月に、サントス丸でブラジルに渡り、昭和十三年に日本製品の直輸入店を開いたと言う。（『ブラジル日本移民史年表』によれば、昭和六十一年四月四日、九十二歳で死去。）

昭和十五年八月刊行の『在伯邦人職員録』には、羽瀬作良商店の従業員として、羽瀬定男（羽瀬作良の弟）・林貞一・谷崎

(写真2) 羽瀬商店。右端が羽瀬定男（羽瀬作良の弟）

徳三（谷崎平次郎・なか夫妻の次男）・谷崎正男（谷崎平次郎・なか夫妻の三男）などの名前が並んでいる。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、貞一・伊勢夫妻は、羽瀬商店のすぐ近くに住んでいた。が、第二次世界大戦の際、ブラジルが連合国側に立って参戦してから、敵性国家の人間として立ち退かされたと言う。『ブラジル日本移民史年表』によれば、これは昭和十七年一月二十九日に、ブラジルが日本を含む枢軸国との国交を断絶した後、同年二月二日と九月六日の二度にわたって、サンパウロ市内の日本人集中地域からの日本人立ち退き命令が発令された頃の事であろう。

戦後、昭和二十九年になって、羽瀬商店の羽瀬記代子という人が日本に来た際、潤一郎はこの人に、文化勲章受賞の際の短歌を短冊二葉に認めたものを託して、伊勢に贈っている（十月八日付け羽瀬記代子宛書簡<sup>514</sup>参照）。伊勢に渡された短冊は、「勲章の胸にかよくけふの日よあはれ父母いまそかりせば」と、「人の世のまことそらことこきませて文作りしを嘉し給ふか」の二葉で、今もブラジルの林シントロウ宅にある（写真3）。

この他、昭和二十七年に「昭和壬辰孟春 谷崎潤一郎（雪後庵印） 道子様」と署名した谷崎訳『源氏物語』、昭和三十一年に伊勢の娘・柴田道子に送った潤一郎の年賀状や、三十

三年の銀婚式の風呂敷（写真4）、「名にしおはば花よ都はわす  
るとも世を侘人のわれな忘れそ 潤一郎」と揮毫した扇子、「ふ  
るさとは田舎侍にあらされて昔の江戸の俵もなし 潤一郎」と  
揮毫した色紙などが遺されている。

昭和三十六年、伊勢は三十六年ぶりに日本を訪れる事になり、  
七月十日、アフリカ丸に乗船し、八月八日、横浜港に着いた（三  
沢悦子さんによる）。約二ヶ月半の滞在期間中の事は、『兄潤一  
郎と谷崎家の人々』に詳しい。

谷崎秀雄氏の日記によれば、この間、九月二十七日の夕方、  
神戸市の秀雄の家で、谷崎家の兄妹四人（得三・伊勢・末・終  
平）が顔を合わせた事があり、また、十月七日には、芦屋市の  
末の家で、伊勢と末夫妻・秀雄夫妻で夕食を共にした事があつ  
たと言う。

こうして、恐らく十一月下旬頃、松子や江沢栄一・久子（後

（写真3）谷崎潤一郎自筆短冊

出）らに見送られて、横浜港から船で帰途に就いた伊勢は、十  
二月十日、無事サンパウロに帰り着いた（三沢悦子さんによる）。  
平成六年六月七日、伊勢さんは九十四歳で亡くなられた。

（写真4）谷崎潤一郎・松子の銀婚式の風呂敷

## 二、谷崎平次郎氏一家について

谷崎平次郎氏（以下、敬称略）は、谷崎久兵衛・花の長男で、潤一郎からは従兄に当たると。しかし、その生涯についても、潤一郎との関係についても、残念ながら、未だ詳しい事は分かっていない。

今回、三沢悦子さんから提供された資料の中に、ブラジル渡航旅券関係の書類があり、それによって、平次郎は明治十四年十月六日生まれである事が判明した。また、昭和二十五年十一

(写真5) なか・平次郎

月十二日に撮影された平次郎と妻・なかの金婚式の写真が遺されていた（写真5）ので、ここから逆算して、二人の婚礼の日取りは明治三十四年十一月十二日と推定できる。これは、この夫婦の長男が明治三十六年六月二十四日に生まれている事（ブラジル渡航旅券関係書類による）とも矛盾しない。

林伊勢の「叔母の死」によれば、この結婚は、中風で長く床に就いていた久兵衛の妻・花が明治三十四年六月二十一日に亡くなり（享年四十四歳）、大きな店を抱えながら寡男暮らしをする不自由を解消するため、久兵衛一家の事情に通じている姪のなかに来て貰うのが適当と、久兵衛が独断で決めたものだったと言う。（これは、久兵衛一家とその兄の江沢藤右衛門一家が、親密な交際を重ねていた事を証する事実でもある。）しかし、恋愛結婚でなかった為、平次郎は放蕩に走り、為に家運の傾きかけた所へ、関東大震災に遭って無一物となり、旧知の人に零落した姿を晒したくないという思いから、ブラジルに渡る事になったのだと言う。

平次郎の放蕩に関しては、例えば、潤一郎の『疎開日記』昭和十九年正月八日に、高木定五郎の第二夫人（Sさんは下谷の芸者にて子が従兄の、目下ブラジルにゐるH（平次郎）氏の馴染なりし事ありき、SさんはH氏を嫌ひて高木に靡くに至りし

ものなり」とあり、その一端を垣間見る事が出来る。

平次郎の結婚に關連して思い出されるのは、精二の『十二歳の時の記憶』(『万朝報』の懸賞小説に当選し、M43/7/25より26掲載)である。この小説によれば、主人公が十二歳(精二なら明治三十四年)の春の半ば過ぎに、蠟燭町の叔父(久兵衛?)の家で、長男・啓造(平次郎?)の婚礼があり、主人公の父母(倉五郎・関?)が仲人を務め、主人公と叔父の娘・美代(隆?)が男媒・女媒の役をした事になっている。これは、大筋では事実ではないかと想像される。

久兵衛一家と倉五郎一家とは、終始密接な關係を保っていたようであるから、潤一郎と平次郎も親しかった筈である。

例えば、精二の小説『祖母』(『秀才文壇』T6/1)には、精二が七つ八つの時分(明治二十九〜三十年)、蠟燭町の本家の離れ座敷で、晩になると兄の春一(潤一郎)や従兄の仙造(善三郎?)が明礬水であぶり出しの絵を描き、精二と従姉のお増(富美子?)・お孝(隆?)が茶の間から廊下伝いにお礼を持ってそれを買いに行く遊びをしていた事が語られている。また、精二の『生ひ立ちの記』(S12/4「早稲田文学」)などによれば、潤一郎と精二は毎夕、久兵衛伯父さんの家へ風呂に入りに行っていた。ただし、平次郎は潤一郎より五才年上だったので、

一緒に遊ぶ事は少なかったかもしれない。

その後の平次郎と潤一郎の接点としては、大正十二年九月一日に起きた関東大震災の際、箱根から一旦関西に逃れた潤一郎が、家族を探しに来て、目黒の山本実彦邸で再会した(今東光『東光蘭帖』による)後、東京府下杉並村の平次郎の許に、十日程、身を寄せた事が知られている。

平次郎の娘・今井栄子さんの証言によると、関東大震災の後には、潤一郎一家の他にも親戚が多数避難して来た。当時、平次郎一家は、荻窪駅のそばに大きな屋敷を構えていた。余震が来ると、そばの竹藪に駆け込んだ。また悦子さんによれば、平次郎の夫人・おなかさんは、「お千代さんは本当に美しい人だ、この様な時にも美しいのだから」と伊勢に語ったと云う。千代子夫人は親切で人柄がよかったので、おなかさん・伊勢だけでなく、皆に愛されていたと言う。

平次郎は、父・久兵衛と一緒に、東京米穀商品取引所仲買人をしていたと思われるが、事業に失敗したため、震災の翌年に、一家を挙げてブラジルに移住する事になった。

平次郎の娘・今井栄子さんの証言によると、平次郎は、ブラジル移住を決意する前に、ブラジルから最近帰って来たトミオカという人と相談し、トミオカの手引きでブラジルに渡ったと

言う。このトミオカについては未詳だが、『ブラジル日本移民史年表』に、『大正四年五月、富岡<sup>オカ</sup>漸が、モジアナ線カニンデー駅サンタ・クルース農場で米作の請負を始める。この種の農業の先駆けとなる。』とある富岡であろうか。

今回、三沢悦子さんから提供されたブラジル渡航旅券関係の書類（写真6）によると、大正十三年九月十三日付けで、谷崎平次郎一家十一人と谷崎邦二に、警視庁から渡航許可が出ている。書類の記載によれば、「労働ノ種類」は「農」、「渡航地」は「ブラジル国サンパウロ州」、「本邦出発ノ年月日」は「大正

（写真6）ブラジル渡航旅券関係の書類

十三年十月十四日」、「契約ノ期限」は「壹農年」となっている。書類の欄外には、「自費移民」の文字が印刷されている。

ブラジルへの日本人移民は、サン・パウロ州のコーヒー農場で、奴隷に代わる低賃金契約労働者として求められたものだった。従って、日本人移民の九割は、コーヒー農場のコロノ（colono）と呼ばれる契約労働者として移住した。契約年限はふつう一農年であるが、収穫期後の転職・転住は比較的容易だったと言う。平次郎一家も、一般の移民とはほぼ同様であったと考えられる。

平次郎一家の家族の生年月日を写して置くと、

家長谷崎平次郎	明治十四年十月六日
妻なか	明治十六年一月十六日
長男健一	明治三十六年六月二十四日
二女梅子	明治四十二年二月二十五日
二男徳三	明治四十五年二月十三日
三男正夫	大正二年一月十七日
四男五郎	大正四年三月四日
三女栄子	大正六年十二月四日（現・今井）
四女喜美子	大正十年二月六日

七男英八郎 大正十一年五月三日

八男昱雄 大正十二年七月九日

となる。「族籍及職業」欄にはすべて「平民農 東京市日本橋区鰯股町一丁目二番地」とある。ただし、『兄潤一郎と谷崎家の人々』に、中西がブラジル移住を決意した理由として、平次郎一家が移住したのを見て、農民でなくても構わないと知った事を挙げている点や伊勢の「叔母の死」で、馴れない百姓仕事で借金が重なったとしている点などから、これは単に書類上、農民としただけと見るべきであろう。

また、同じ日に渡航許可の出ている谷崎邦二は、平次郎の甥と記載され、「族籍及職業」欄は「平民農 東京市日本橋区鰯股町一丁目四番地」となっていて、平次郎一家とは番地だけが異なっている。「生年月日」欄には、明治三十三年九月十八日とある。

三沢悦子さんによれば、邦二は久兵衛・花の長女・きくの子で、平次郎一家の“*attaché*”のような事をしていて、脚が少し悪かったが、今思えばそれは結核性のものだったかも知れない、親切な人だったが、肺結核になり、独身のまま四、五十歳で亡くなったと言う。

平次郎一家が出発する直前の十月十日に、潤一郎が長崎の知人・永見徳太郎に宛てて、便宜をはかってくれるように依頼した手紙が遺されているので、大谷利彦氏の『続長崎南蛮余情』から全文を写して置く。

今度小生の従兄にあたる谷崎平次郎氏家族を引き連れ、南米ブラジルへ移住いたしますので、前に同国名誉領事をしてらした大兄にお目にかかり、もし何等か紹介でも頂ければ便宜もあらうかと存じ、来る十四日神戸出帆メキシコ丸にて御地へ寄港の際、右平次郎氏小生の名刺を持参御宅へ参る筈ですが、何卒その節は御面倒ながら宜しく御取り計らひ下され度、右くれぐれもお願ひ申上げます

「めきしこ丸」は、大阪商船の移民船で、明治四十三年に建造され、大正十五年に引退した。三等船客二百人程度を乗せ、神戸から長崎を経て、南アフリカの喜望峯を回り、サントス・ブエノスアイレスに到着、帰りはパナマ運河経由で大西洋を横断していた（山田迪生『船にみる日本人移民史』中公新書）。

谷崎終平の『懐かしき人々』によれば、渡航前、平次郎一家が神戸の大きな宿屋に居た時、千代子が梅子に服を買ってやりたいたいから、と終平を迎えにやった事がある。



平次郎の娘・今井栄子さんによれば、平次郎一家は、この年十二月十七日にブラジルに上陸した。メキシコ丸で七十日程かかったと言う。また、江沢栄一氏夫人の千恵さんによれば、メキシコ丸に知人が居たため、一家は無料で行けたと言う。

ブラジル到着後の平次郎一家の動静については、未だ十分な調査が出来ていないが、昭和八年の伯刺西爾時報社編『伯刺西爾年鑑』の「在伯邦人住所録」によれば、サン・パウロ州ソロカバナ線 (Linha Sorocabana) のオウロラ植民地 (Col. Aurora) の所に、谷崎平次郎は、(農業) 家族十二人・大正十五年渡伯・コロノとして記載されている。大正十五年渡伯となっているのは、一旦帰国して再渡伯したのが大正十五年だったからであろう。

日本のブラジル移民は、サン・パウロ州中部・北部の大農場地帯で数年間のコロノ生活を経た後、安価な開拓地に自分の土地を手に入れ、綿・野菜・コーヒーなどの独立小農となる事が多かったと言われている。しかし、平次郎一家は、この時点でまだ低賃金の農業労働者の生活から抜けられずに居たのである。

同住所録のサン・パウロ州ソロカバナ線プレシデンテ・ウエッセスラウ駅 (Est. Presidente Wenceslau) の所にはまた、「谷

崎健一(商業) 大正十四年渡伯」、「谷崎邦三(教員) 大正十三年渡伯」とある。健一は平次郎の長男が独立したものの、邦三は甥の邦二の誤植と見て間違いなからう。

終平の『懐かしき人々』によれば、健一はブラジルで四十代で亡くなり、梅子もまた早死にだったと言う。

平次郎の娘・今井栄子さんによれば、平次郎宛の潤一郎の書簡は遺されていない。仮に潤一郎が手紙を送っていたとしても、第二次大戦中、日本がブラジルの敵国となった際に焼き捨てられたであろう、とのお話であった。

### 三、江沢家の人々について

谷崎平次郎一家と同じ日、恐らく同じ船で、江沢一家がブラジルに渡った。それは、周知のように、平次郎の父久兵衛が、もともと江沢家から谷崎家に養子に入った人だったからである。

江沢家は、潤一郎にとっても父倉五郎の実家に当たり、重要であるにもかかわらず、これまで余り詳しく調査された事が無い。そこで、今回、新資料によって新たに判明した事実を交えつつ、以下に簡単に紹介して置く。

精二の『生ひ立ちの記』によると、江沢家は『八代伝』で名高い里見氏から出た家柄で、里見氏の滅亡後、江戸へ出て商人となつてから、倉五郎までだけでも八代続いた旧家であり、江沢家には清和天皇以来の系図が残っている筈だと言ふ。

今回の調査では系図は発見できなかったが、江沢家の菩提寺・善国寺にあつた過去帳の写しを、千恵さんの御好意で拝見させて頂いた。その写しでは、初代と思しき正徳五年（一七一五）の男性の戒名と、その妻と思しき正徳三年（一七一三）の女性の戒名が最初となつており、歴代の当主と思しき人物（信士号の人物）を数えて行くと、久兵衛・倉五郎の父とされる秀五郎までで百五十六年間に十一人を数える事が出来る。これは、精二の言う八代より多いようだが、当主の死去した年代の間隔が、短い方では零年の場合が一回、二年の場合が二回、八年・十五年・十五年の場合が各一回あり、その中には兄から弟へ家督が相続されたケースが何回かはあつたと想像されるので、精二の言う通り、実質は八世代ほどであつたと考えられる。

江沢氏と里見氏との関係は確認できなかったが、里見氏は、里見忠義の時代、慶長十九年（一六一四）に、老中大久保忠麟が謀反を企てたと疑われた事件に連座して、伯耆の国倉吉に流され、滅亡しているので、江沢氏がそれから江戸へ出て商人に

なつたという説も、かなりの説得力がある。善国寺の過去帳で、初代当主と思しき男性は正徳五年（一七一五）に没しているが、享年を七十と仮定すると一六四六年の生まれであり、ほぼ辻蔵が合う。

一方また、潤一郎は、『朱雀日記』の「嵯峨野」の章で、江沢家の先祖は新田義貞の妾・江沢局であると述べている。これは江沢家所蔵の系図にその様な記載があつたのであろうが、新田氏の祖は清和源氏の源義重、里見氏の祖は義重の次男義俊であるから、新田氏と里見氏とは極めて近い関係にある。従つて、江沢氏が里見氏の一族なら、江沢氏の女性が新田義貞の妾になつた可能性は、充分考えられる。この点からも、里見氏出自説はかなり有力であると言つて好いかも知れない。（ただし、伊勢の「叔母の死」によれば、江沢の局は新田氏の子孫で、女官として官中に出仕していた雪の朝、天皇から「香炉峰の雪は如何ならん」と訊かれて、直ちに御簾を掲げた機転によつて御感を得、「江沢の局」の名を与えられた。以来、子孫は江沢を姓としたと言ひ伝えられている。）

江沢家は、江戸末期には玉川屋という屋号で酒屋を営み、土蔵を十一戸前も引き回した大きな構えだつた（潤一郎『幼少時代』）と伝えられている。しかし、それはかなり幕末に近付い

てからの事のように、元禄六年（一六九三）の『諸国万物買物調方記』、享保十七年（一七三二）の『江戸砂子』、安永六年（一七七七）の『富貴地座位』などには、玉川屋の名前は見当たらない。それが、例えば文政七年（一八二四）刊行の『江戸買物独案内』になると、玉川屋を屋号とする商人としては、醤油酢問屋の項に、湯島横町玉川屋藤右衛門、神田旅籠町一丁目玉川屋長左衛門、本材木町四丁目玉川屋源七、赤坂伝馬町一丁目玉川屋兵四郎の名が見え、長左衛門は乾物問屋（卸）、源七は明樽問屋の項にもその名が挙げられているという躍進ぶりである。しかし、酒問屋の項にはまだ玉川屋の名前はない。

ところが、綾部颯子さんからの御教示によると、『千代田区史』が引く嘉永四年（一八五二）の「諸問屋名前帳」では、地廻米穀問屋および脇店八ヶ所組米問屋として、長左衛門と永富町三丁目の玉川屋利右衛門、春米屋として永富町一丁目の玉川屋利右衛門、地廻酒問屋として、長左衛門と藤右衛門、薪炭仲間として本銀町四軒屋敷の玉川屋金兵衛、番組両替屋として長左衛門と藤右衛門と旅籠町一丁目の玉川屋牛之助が挙げられている。（江沢家過去帳写しには、明治十三年に死亡している内神田旭町玉川銀次郎の戒名が挙げられているが、旭町は永富町二〜四丁目を明治二年に改称したものであるから、銀次郎は利右

衛門家の家督を相続した後、没落し、藤右衛門家の墓に入ったか、と考えられる。）

ついで『千代田区史』が引く嘉永七年（一八五四）の江戸の富商からの御用金徴発の一覧表には、八月二十二日の所で長左衛門が二百両、藤右衛門が百両、翌二十三日の所で、旅籠町一丁目の玉川屋馬之助が五十両と出ている。

また、「風俗画報」（M33/207号）に引く文久元年（一八六一）「外神田高銘見立四天王」に挙げられている店の内、酒仲買（玉藤）・質見世（玉勘）・酒（玉新店）・酒乾物（玉川）は、玉川屋一族と推定される。玉藤は玉川屋藤右衛門の略称と見て間違いあるまい。

『千代田区史』が引く慶応年間（「江戸食物独案内」）にも、酒の項に「升酒 外神田旅籠町 玉川」とある。恐らく、藤右衛門家は、嘉永四年以前に醤油酢問屋から酒問屋に転業したのであろう。

玉川屋の繁栄は、明治維新の頃まで続いたようで、篠田鉞造の『明治開化奇談』『神田っ子の町内噺』が引く昭和十八年に八十三才だった（一八六一年生れの）広瀬老人の回想によれば、明治維新の頃まで、玉川屋一族は神田旅籠町の一郭を一族で占め、酒・乾物・茶・米・質などの店と土蔵を並べて、その辺り

は玉川の辻と言われたと言う。

これほど栄えていた玉川屋一族が、藤右衛門家だけならともかく、すべて、しかも短期間に没落してしまったのは何故だろうか。綾部さんによると、谷崎終平氏は、彰義隊の驍勇や維新の混乱に巻き込まれた事がその原因であろうと、父倉五郎から聞いたと言う。それを受けて、綾部さん自身は、幕末の世直し一揆の頂点として慶応二年の五月六月と九月に神田を含む江戸の各地で起こった打ちこわしが原因ではないかと推定し、質屋・米屋・酒屋などは特に狙われやすかった事(『千代田区史』)をその理由に挙げておられる。どちらも充分に考えられる仮説と思う。

しかし、こと藤右衛門家に関する限り、没落の決定的要因は、潤一郎が『幼少時代』に述べている通り、久兵衛・倉五郎の父である十一代目江沢藤右衛門(秀五郎)夫妻が若死にした後、後見人が勝手に商売の切り盛りをし、使い込んだりした事にあるようである。

従来、この秀五郎夫妻の死亡時期が定かでなかったが、先に述べた過去帳の写しに、秀五郎の妻については、《遠紹院妙性日耀信女 文久二戊七、八、相生町玉川秀五郎妻》、秀五郎については、《顯誠院行動日秀信士 明治四未十二、四、玉川秀

五郎事》とあり、明らかになった。

ところで、興味深い事に、この写しによると、秀五郎の死に先立つこと僅か二年の明治二年に、《芳寿院快節日義信士 明治二巳七、十五 玉川藤右衛門》と《遠修院了達日成信士 明治二巳十、十 玉川藤右衛門三十五(？ 判読困難)才》という二人の藤右衛門の戒名が並んでいる。恐らく前者は九代目藤右衛門で、秀五郎の父が老衰で亡くなったものであろう。そして、その僅か三ヶ月後に三十代の若さで亡くなったのは、秀五郎の兄に違いない。この事の傍証となるのは、安政六年十月十五日に秀五郎の三男・倉五郎が誕生しているのに、同じ年の過去帳に、《智岳教時孩子 安政六未十一、八、玉川藤右衛門娘》と記録されている女兒が存在する事である。もしこれが藤右衛門⇨秀五郎の娘だとすると、倉五郎は二卵性双生児で、女の子の方だけ約一ヶ月後に死亡したと考えねばならないが、この藤右衛門は秀五郎の兄の十代目で、兄弟に相次いで子供が産まれたと考えれば、自然に理解される。また、先に引いた秀五郎の妻の戒名への注記に《相生町玉川秀五郎妻》とあったのも、秀五郎は五男で、家督は兄が継いだ為、分家して相生町に別家を構えていたと考えれば、自然に納得される。

恐らく藤右衛門家では、明治二年に九代十代の藤右衛門父子

が相次いで死亡した為、急速、五男の秀五郎が跡を継いだ、その秀五郎も二年後に若死にし、それが没落の主な原因となったのであろう。

秀五郎の兄の死亡年齢を三十五とすると、秀五郎は三十そこそこの若さで亡くなったと考えられ、秀五郎より九年早く文久二年（一八六二）に亡くなっている秀五郎の妻は、長男の十二代目藤右衛門を産んだのが嘉永七年（一八五四）である事（後出、ブラジル渡航旅券関係の書類による）も考え合わせると、まだ二十代で亡くなった可能性が高い。

十代目藤右衛門には、先に挙げた女の子の他に、男の子が一人居たらしいが、その子も明治五年の所に《玉泉日光善童子明治五申五、六 玉川藤右衛門子十三才》とその死亡が記録されている。

一方、秀五郎の子供たちは、明治四年の時点では、長男十二代目藤右衛門が数え年十八才、実之介（後の久兵衛）が十五、和助（後の倉五郎）は十三才だった。潤一郎の『幼少時代』では、もっと幼なかつたような印象を与えるが、事実はこの通りであった。

遺された江沢家の三兄弟の内、久兵衛は、四年後の明治八年、数え年十九歳で谷崎家の長女花の婿養子となった（『大正三年

米之理想』）。そして、明治十六年には、倉五郎も、三女関の婿養子となり、潤一郎を生む事になるのである。

それでは、秀五郎の長男十二代目江沢藤右衛門は、どうなったのか。実は谷崎平次郎一家と共にブラジルに渡ったのが、この十二代目江沢藤右衛門一家なのであるが、そこに至る前に、これまで殆ど知られていなかったこの人物について、今回判明した事実を報告して置かねばならない。

三沢悦子さんから提供されたブラジル渡航旅券関係の書類によると、十二代目江沢藤右衛門（写真7）は嘉永七年（1854）

（写真7）十二代目江沢藤右衛門

元年 一八五四）十月十五日生まれである。

三沢悦子さんから提供された書類の中に、表紙に「明治四十一年八月十日 常修院妙晋日解信女 附けたり葬式前後之記事 江沢藤右衛門」と記された、藤右衛門がその妻・しんの葬儀の後に記したらしい文書があるので、以下それによって記すと、藤右衛門は父秀五郎を失った翌明治五年十一月、小中村清矩（一八二一〜九五、後に文学博士・東大教授・貴族院議員となる。写真8・9）の三女・おしん（嘉永六年（一八五三）八月二十五日生まれ。俗名晋子）と結婚している。

小中村清矩については、戸籍簿が関東大震災で焼失しているとの事で、おしんの名は、昭和女子大学『近代文学研究叢書2』「小中村清矩」の家族の記載からも漏れている。この結婚がどのような縁で結ばれたかは不明であるが、小中村家は江戸の商家で（野村尚吾『伝記谷崎潤一郎』に引く、谷崎精二の談によれば、質屋だった）、清矩も三十二歳で家業を譲るまでは商業に従事していたから、その関係であろう。また、この時点ではまた玉川屋一族の名望も、なお相当のものだったであろう。

藤右衛門の手記によれば、おしんとの間に生まれた子供たちの生年月日は以下の通りである。

（写真9）小中村清矩と妻たつ子

（写真8）神祇大史従七位小中村清矩（51歳）

長男神太郎（のちに馬之助を襲名） 明治七年六月

長女澄子・次女清子 明治九年二月十六日双子（命名は外

祖父・小中村清矩が行い、「澄みわたる江沢のふち（淵・

藤）の二た方に流れて清き生ひ先や見ん」と歌に読んだ。）

次男齊次郎 明治十二年十月十日

三女仲子 明治十七年一月十八日（この生年月日は、何故

かブラジル渡航旅券関係書類と約一年食い違っている。）

この内、長男・神太郎が襲名した馬之助とは、先に引いた嘉永四年「諸問屋名前帳」で、番組両替屋の項に名前の挙がっていた旅籠町一丁目の玉川屋午之助、および嘉永七年御用金徴発一覧表の馬之助の何代目かであろう。馬（午）之助は、住所から推して、長左衛門家の分家の当主に用いられた名ではないかと考えられる。しかし、この人は短命に終わり、江沢家過去帳写しに、『秋光院瑞雪日亮信士 明治33・10・28遠行院ノ子』と記載されている。享年二十七才だった。

藤右衛門家の家督を継いだ齊次郎については、潤一郎の父・倉五郎と一緒に撮った写真が遺されており（写真10・11）、また、三女の仲子も、久兵衛の長男・平次郎に嫁いでおり、両家の親密さが窺われる。

(写真11) 江沢齊次郎

(写真10) 谷崎倉五郎と江沢齊次郎

藤右衛門の手記によれば、妻・おしんは、明治十三年一月から一年余り、明宮嘉仁親王（明治十二年八月三十一日生まれ。後の大正天皇）の乳人となっている。齊次郎を産んだ後だった事と、父の小中村清矩が国学者で、明治二年に太政官制度局で官制組織・即位大祀の取調べに当たったのを始めとして、この頃、文部省の『古事類苑』の編集、内務省社寺局御用掛・東京大学講師など、要職を兼務していた事から選ばれたのであろう。

以来おしんは、毎年大正天皇の誕生日に参殿し、帰途従一位中山慶子局（明治天皇生母）邸及び柳原愛子（大正天皇生母）官邸に挨拶に伺った。明治三十三年五月十日、大正天皇の婚儀の節にも参賀し、御祝儀として金二十五円、御着として白縮緬一反を賜った。明治三十四年四月二十九日、迪宮裕仁親王（後の昭和天皇）誕生の節にも、御祝いに参賀し、種々の下し物を賜った。明治四十年十月五日、中山慶子局薨去の節には参邸葬送し、御遺物として白羽二重拾一枚と碧明石拾一枚を賜っている。そして、明治四十一年八月十日、おしん死去に際しては、青山東宮職より祭祀料として金二十五円を賜った。

潤一郎は、おしんが拝領した紫の衣を所望して貰い受け、大切にしていたと言う（高木治江『谷崎家の思い出』）。また、昭和二十年七月一日付け久保一枝宛潤一郎書簡289によれば、潤一

郎はそうした拝領の品々を、『細雪』のお春どんのモデルである久保一枝さんに、すべて贈り与えたようである。（江沢千恵さんの手元にも、大正天皇からのお下りの品が遺されていると言う）。

藤右衛門の手記によれば、明治四十一年八月十日、おしんは急性腹膜炎のため、亡くなった。享年五十六歳。葬儀は十二日に執り行われ、午前八時出棺。牛込区神楽坂上善国寺にて葬儀の後、直ちに落合火葬場で荼毘に付された。たまたま七月に善国寺から池上本門寺に移されていた江沢家累代の墓地に、九月二十七日、四十九日の日に納骨された。「到来物一覽」とした中に、谷崎本店より茶切手貳円、谷崎倉五郎より金参円外に少し一重、谷崎久右衛門より金三拾円外に御寿司等一重・枝豆一重・造り花一对、皇太子殿下から金二十五円などと、細かく記録されている。

藤右衛門が、結婚後どんな職業によって生計を立てていたのかは、現時点では殆ど分かっていない。が、おしんの葬儀から二年後の明治四十三年二月に交詢社から刊行された『第十五版 日本紳士録』『東京の部』を見ると、江沢藤右衛門は、『料理業、本所区吉田町三六、所得税二一円、営業税七一円』と記載されている。江沢千恵さんによれば、これは肉料理の店で、い



つから始めたのかは分からないが、余り長続きはしなかったらしい、との事である。

また、同じく千恵さんによれば、江沢齊次郎は、岩谷松平の煙草会社に勤務していた時期があったようだ。これもいつからいつまでか分からない。「岩谷天狗」の煙草は、明治十三年に始まり、明治三十八年の専売制実施に際して政府に買収されているから、この時点で辞めた可能性も高い。

なお、『第十五版 日本紳士録』にはまた、江沢姓の者が他に八人掲載されているが、その内神田連雀町に住む以下の四名については、玉川屋の分家の子孫ではないかと想像される。(ただし、江沢千恵さんは、江沢家の親戚の話は全く聞いた事がないと言う。)

《江沢由三郎 萬屋、青物商、神田区連雀町七、所得税四八円、營業税一二五円、電話・本八五〇》

《江沢幸吉 萬屋、青物商、神田区連雀町七、所得税五六円》

《江沢浅吉 萬屋、青物商、神田区連雀町一三、所得税五六円、營業税七七円》

《江沢浦吉 萬浦商店、青物商、神田区連雀町一五、所得税七五円、營業税八五円、電話・長本二二九一》

時期は前後するが、明治十三年七月刊『東京商人録』の「神

田市場藥物青物問屋」の部にも、江沢姓の浦吉・浅吉・松五郎(連雀町七番地)・久蔵(連雀町十四番地)の名前がある。また、『千代田区史』に引く明治十三年五月七日付けの神田市場

西組問屋附属仲買規約書に、仲買総代として署名しているのも神田区連雀町七番地の江沢松五郎である。松五郎については、

明治十九年、神田川の柳原土堤跡地が、防火建築にすることを条件として貸し下げられた時の「拝借願」も遺されている(石川梯二の『近代作家の基礎的研究』)。そして、江沢浦吉については、『千代田区史』の資料から、明治四年九月二十八日生まれで、大正十四年十一月二十九日から昭和四年十一月二十八日まで、神田区会議員(一級)を務めたことが分かる。連雀町の江沢家は、神田の青物市場で、長く勢力を保っていたらしいのである。

しかしながら、藤右衛門一家が結局ブラジルに移住しなければならなかった事から見ると、これらの人々は、藤右衛門一家に救いの手を差し伸べるほど、深い関係にはなかったと想像される。

料理業で一応の成功を収めていたらしい藤右衛門一家が、その後、何故ブラジルに移住せざるを得なくなったのか、その経緯は、今の所、判っていない。が、谷崎平次郎と江沢齊次郎が

相談の上、一緒に渡航する事に決めたのであろう事は、疑いを入れられない。

三沢悦子さんから提供されたブラジル渡航旅券関係の書類によると、先ず、警視庁から渡航許可が出たのは大正十三年八月二十日付けである。「労働ノ種類」「渡航地」「本邦出発ノ年月日」「契約ノ期限」自費移民である事などは、すべて谷崎平次郎一家と同じである。

江沢一家の「族籍及職業」欄には、すべて「平民農 東京府豊多磨郡渋谷大字中渋谷三百四十一番地」とある。ただし、先にも述べた通り、「農」とあっても、必ずしも農業を営んでいたとは限らないようである。

家族の生年月日を写して置くと、

家長江沢齊次郎 明治十二年十月十日

妻久子 明治二十年七月十九日

父江沢藤右衛門 安政元年十月十五日

長男栄一 明治四十二年九月十三日

二男晋二 明治四十四年一月二十七日

三男桂三 大正三年十一月三日

四男四海 大正九年十一月十二日

二女延子 大正七年一月二十六日

三女菊枝 大正十二年十月二十一日

となる。

この内、藤右衛門については、江沢家過去帳写しに《遠行院厚徳日喜信士 大正15・11・21 伯国ニテ客死 江沢藤右衛門事七十四才》とあり、渡航から二年後に亡くなった事が分かる（実際の享年は七十三）。《遠行院》という成名は、遠くブラジルまで行った事に因むものであろう。

千恵さんによれば、江沢藤右衛門は高齢で、本当は行きたくなかったのだが、娘のなかが谷崎平次郎と一緒に行くので、仕方なしに付いて行ったのだと言う。

江沢家の人々のブラジル移住後の動静については、未だ十分な調査が出来ていないが、千恵さんによれば、最初は農業をやったが、後にはサンパウロに出て、他の職業に従事したという事であった。

事実、昭和八年六月十八日発行の伯刺西爾時報社編『伯刺西爾年鑑』の「在伯邦人住所録」によれば、長男栄一はサンパウロ市 R. Conde Sarzedas 22 の日本新聞社社員、江沢齊次郎一家は、サンパウロ市 R. Oliveira Monteiro 2 で商業を営んでい

る事になっている。(この他、サンパウロ市 Rua da Liberdade 146 の日伯社社員に江沢才次郎の名があるが、関係は未詳。)

千恵さんによれば、その後、栄一氏は外務省の現地募集の試験を受けて、外務省の職員となった。

この年鑑では生きている事になっている齊次郎は、千恵さんによれば、昭和八年六月十日に亡くなった。享年五十五才。戒名は寿量院法橋日斎信士である。千恵さんによれば、齊次郎の死因は腸チフスカ何かであつたらしい。

また、齊次郎の妻・久子と長男・栄一は、第二次大戦中に交換船で、日本に永住帰国し、共に八十一才まで生きたと言う。『ブラジル日本移民史年表』によれば、この交換船は、昭和十七年七月三日、国外退去を命じられた日本のブラジル大使や総領事に乗せた中立国スウェーデン籍のグリップスホルム号であろう。

なお、千恵さんと栄一との結婚は、栄一の帰国後、戦後の事である。栄一は、戦後、潤一郎に料亭に食事などに呼ばれた事が何回かあったし、精二にも、栄一と千恵さんとで会いに行つた事があると言う。

#### 四、得三氏について

潤一郎の三弟・得三氏(以下、敬称略)の生涯については、まだまだ不明の点が多いのだが、従来知られている事に精二の『骨肉』(『不同調』T14/8)と谷崎秀雄氏から知り得た新事実を加え、以下にまとめて置く。

得三は、明治二十六年、倉五郎・関の三男として生まれたが、すぐに千葉県東葛飾郡中山村の小泉家に里子に出された。

林伊勢の『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、小泉家は大きな菜種屋だった。最初は里子だったが、小泉家では生まれて間もない一人子を亡くしたばかりだったので、可愛がられ、そのまま養子になった。

精二の『骨肉』によれば、精二は子供の時分、両親に連れられて、小泉家へ二三度遊びに行った事があると言う。

ところが、『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、得三が十二三歳の頃(時期は未確認)、養母が亡くなり、養父が悲しみの余り、酒に身を持ち崩し、家屋敷も手放さねばならなくなつた。

この時期の事であろうか、『骨肉』によると、精二が小学校三四年生で得三が七八歳の頃、得三は谷崎家に戻って、暫くし

よんぼり過ごしていた事があった。恐らく、養家が生活に困るようになった為であろう。しかし精二は、セキが「自分の生んだ子なのに、どういふものだからちっとも可愛くないんですよ」と髪結に語るのを耳にした。そして、得三は、結局また小泉家へ帰って行ったと言う。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、得三の養父は、得三を浅草の或る大きな店に奉公に出し、その給金さえ前借りして酒代にするようになった。

多分この時期の事であろう、『骨肉』によると、精二が二十二歳の時、妹・園が死んだ後、という事は明治四十四年の後半に、神田区南神保町の家に得三（十九歳）が訪ねて来た事があった。丁度、セキと精二と潤一郎が居合わせた。その時、得三は何処かで古着屋の番頭をしているという話だった。年より大人びた商人らしい姿を見て、セキも「立派になったね」と感慨無量の態だった。それから大正十四年まで、得三とは音信不通になった。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、得三が十五六歳の頃（恐らくは十九歳の年か？）、朋輩に誘われて料理屋に行った所、その代金が店の品物を持ち出して作った金である事が分かり、得三も有罪にされた。それ以後、得三との音信は絶えた。

伊勢が十三三の頃（恐らくは明治四十五年頃）、セキが、得三は朝鮮に行ったという噂があると云って涙ぐんでいた事があったと言う。

ところが、大正十四年、丁度、伊勢が中西の許を逃げ出し、半年程、潤一郎の許へ身を寄せていた間に、二十年來行方不明だった得三から手紙が来て、その三日後ぐらいに訪ねて来た事があった。父・倉五郎にそっくりだった。

その時の得三の身の上話によれば、仕事に困る事はなかったが、一二年勤めていると結婚を勧められ、前科のある事を隠すために逃げ出さざるを得ず、独身のまま職を転々としていた。最近、養父が死んで一人になったため、肉親が恋しくなつて訪ねて来た、という話だった。

『骨肉』によれば、精二は東京であつて、得三と直接は会わなかったが、潤一郎からの手紙で、得三が会いに来る事を聞いた。その数日後、今度は終平からの手紙で、訪ねて来た得三の様子を知った。それによれば、得三は大阪で肉体労働者のような生活をして居るらしかった。得三が訪ねて来た日は、たまたま園の祥月命日（六月二十四日）だったので、死んだ姉さんの引き合わせだと皆で噂しているとあつた。その数日後には、得三自身からも精二に手紙が来た。

翌大正十五年四月五日付け精二宛潤一郎書簡66には、得三はこの頃又大阪へ帰って来て、病気だと言って時々使いを寄越しでは金を借りに来る、とある。

これ以後、得三の動静は、再び長い間、分からなくなる。しかし、石川達三の『心に残る人々』によれば、昭和三十二、三年頃、石川は、新和歌の浦の旅館に泊まった際、その下足番をしている老人が、谷崎潤一郎の弟だという噂を聞いている。

また、『兄潤一郎と谷崎家の人々』によると、昭和三十六年八月に日本を訪れた伊勢が、熱海に潤一郎を見舞った際、得三の事を訊くと、潤一郎は「得三は和歌の浦の宿屋で帳付けをしたり、客の荷物を運んだりしているが、年を取って働けないから老人ホームへ入りたいと言っているので入れようと思う。が、どういうのかはっきり返事をしない。女がいるようだ。今度会う時に早く返事をするように伝えてくれ」と伊勢に頼んだ。

谷崎秀雄氏の日記によると、この後、九月二十七日の夕方に、神戸市東灘区深江の秀雄宅で、得三・伊勢・末・終平らが顔を合わせた（谷崎秀雄氏所蔵写真12）。

『兄潤一郎と谷崎家の人々』によれば、この時、伊勢は、得三に「老人ホーム問題について早く返事をするように」という潤一郎の伝言を伝えたが、伊勢の日本滞在中には結論は出な

った。しかし、伊勢がブラジルに帰って約一年後、昭和三十七年の末か三十八年の初め頃であろうか、得三がM県E浦の老人ホームから出した手紙が伊勢に届いたと言う。

谷崎秀雄氏のお話によれば、得三は、老人ホームに入る前、和歌山の新和歌浦の望海楼という旅館で下働きをしていた。正式の結婚もせず、独身だった。潤一郎が大変心配して、老人ホームに入居させた。その手続きは、潤一郎の指示を受けて、秀雄が行った。得三が入った老人ホームを入った順番に挙げると、①明石市太寺三丁目三一日本綜合老人ホーム、②熱海市汐見町国立熱海病院、③熱海市伊豆山厚生省年金老人ホーム寿楽荘、④小田原市蓮正寺七三一あしがり荘、⑤厚木市山際五三五河野病院、⑥神奈川県足柄上郡開城町金井島一九八三高台病院、となる。秀雄氏のお話では、伊勢の言うM県E浦の老人ホームについては、少なくとも宮城県や宮崎県ではあり得ない。三重県かも知れないが、記憶にはないとのことである。また、潤一郎は中央公論社の故嶋中鵬二社長に依頼し、得三の老人ホームにおける諸費用・小遣いなどを、終身、中央公論社の負担において面倒を見て貰うという契約を結んだ。この契約は、潤一郎の死後も守られた。潤一郎には、このような肉親思いの面があった、との事であった。

最後に、谷崎秀雄氏の御好意により、氏が所蔵されている潤一郎と松子の書簡をここに紹介させて頂く事にする。これらの書簡によって、潤一郎が得三の老後を心配して、早く老人ホームに入居させようとしていた事、そして恐らくは昭和三十七年六月以降のそう遅くない時期に、得三が老人ホームに入った事が推測できるのである。

昭和三十七年五月十五日付け谷崎秀雄宛谷崎潤一郎書簡\*全集未収録・谷崎秀雄氏所蔵(秀雄氏の筆写による)  
熱海鳴沢から

得三の件につき申し入れます  
老人ホームに空室がなかつたら暫くアパートに住んでもいい、と云つたけれどもその場合君達の迷惑も察せられるのでアパート住ひは許可しないことに決めますよつて得三に次のやうに申し渡して下さい

一、アパートでもいい、と云つたけれども私の考へが變つた、やはりアパートはよろしくないと思ふので是非老人ホームに入つて貰ひたい

一、熱海の老人ホームは二ヶ所にあるが二ヶ所共満員で当分空室の出来る見込みはない。だから阪神間か垂水方面の空室のあるホームへ入って貰ひたい。お梅さんが見付けて来たホームと云ふのが空いてゐるならそれにしたらいい、是非さうしなさい。一、どこも空いてゐない場合にはどこかが空くまで現住所に止つてゐなさい。その間の生活費は送つてあげてもいい、が空いたら必ずすぐそこへ入つて貰ひたい。

一、ホームが決りそこに住むやうに決定したらその上で私が面会する、それも熱海へ来ないでもよろしい夏か秋には私が京都へ行くからその時知らせる。

右のやうに返事して直ぐ実行するやうに云ひ渡して下さい。

返事を待つてゐます。

五月十五日

谷崎潤一郎

谷崎秀雄様

後も、お末さんと終生親交があった、と言う。

昭和三十七年六月一日付け谷崎秀雄宛谷崎潤一郎書簡\*全集未収録・谷崎秀雄氏所蔵(秀雄氏の筆写による)

熱海鳴沢から

二十八日付お手紙拝見。いろ／＼御面倒をかけて有難う。誓約書別書の通りしたゝめたからこゝに封入します。今一人の保証人は御面倒ながら君にやつて貰うのがいいと思ふのでお願ひする勿論形式上のことで何かの場合の責任は私が引き受けるから迷惑はかけない月々の仕送りの金は一万二千元と云ふことにする。得三にぐず／＼してゐないで一日も早くホームに入るやうに伝へて貰ひたい。最初の一万二千元はいつ送金したらいいのか通知があり次第ホーム宛に送金します。

右要用のみ

五月三十日

谷崎潤一郎

谷崎秀雄様

〔注〕お梅さんは、秀雄氏によれば、昭和十年頃、打出時代の谷崎宅に奉公していた女中のお秋どん(本名・梅乃)で、退職

得三には今年の秋に神戸へ行くからその時に神戸で会ふことに

したいと思つてゐる。その旨得三に云つておいて下さい。老人ホームの所番地電話番号知らせて下さい。

谷崎潤一郎

※同封されていた松子の手紙

(略) 又得三さんの事に就きましては御煩勞を相かけ済みませんでした御蔭様で大変良い処へ決まりまして伯父様も漸く気が落着かれた様子ですさて保証人の署名を致しましたが統柄の点で一才困つたのです。本当の関係を明かせば万一週間誌に興味を持たれても不愉快な思ひをしなければなりません。このころの週間誌については御承知の通り諸々へ取材に廻らせてゐる人があるさうですそれで考へさせられたのですが或は会長にだけ事実をお打ち明けすることにすればと思ふのですが幼い頃養子にやられ養家が没落の為不遇であつた事等を会長だけ御承知で秘して置いて戴ければ一番よいのですがその場合書類には統柄をどう書けばよいかと問題なので其の点会長に御相談願ひたくたゞの縁続き位に書いて戴くかそれとも提出の書類を誰にも見られないなら事実の関係を書いてもらつてよいのです  
彼様なことを会長と御面談の上今後の面倒を見ていただきます

やう宜敷お願ひ下さいませ近ければ私が参りましてお願ひ致したいのですが今家をあけること難かしいものですから万事御配慮願ひますこの事は秘書の人に書かせられませんで私が代筆致しました

かしこ  
松子

なお、小泉得三氏は、昭和六十三年五月十七日、九十五歳で亡くなられた。